

担架で微かに歌う校歌

故 須子 武の弟

須子 剛

兄さん、安らかに眠って下さい。

昭和20年8月6日 — 9年前の広島、世界はめまぐるしいほど変わりました。軍国主義が民主主義に、科学も、原爆から水爆になり、9年間、毎日毎日、第三人は、兄さんのことが、一時も忘れられません。しかし、きつときつと平和はきます。

8月6日、兄さんが西条駅に、戦闘帽にゲートル、重そうなリュックサック、胸には真白な布で一中学徒隊のマークをつけて、うすぐらい朝五時すぎ、霧の中を、お母さん、いってきます、弟よ、いってきます。東の空へは、支那の父さんへのあいさつをして、細長い顔をきつくして、それからにこり笑って、走って行ったのは、いまでも目の前にうかびます。

しかし、6日も7日も、やさしい兄さんは帰りません。8日に、母につれられて、みぐるしい顔、いたましい体。ぼろぎれがさがったような手をふりながら、タンカの上で一中校歌を歌いながら帰ってきました。ああ、兄さんが帰った、と兄弟はよろこんだのもつかの間でした。

兄さん、どうしたの。兄さん、何かあったの。顔は半面焼け、ランニング一枚、焼けくずれたズボン、長ズボンが半ズボンにちぎれ、足は跣足でところどころ大きなやけど、これが兄か、恐ろしい、と小さなかすかな声で、思わずいったことを、おぼえています。

兄は、手をふっては、僕は一中学徒隊です。友人四人を引き出して、僕は火の中をどうして落けたかわからない。親友の宮野君は死んでいた。僕も行くのだ。

身は学徒の身にて死するとも

やすくにの神にて守る

と半狂人のように云う兄。鼻の中は悪臭で、傷つけた口。またしても一中校歌をさけび、熱は四十度を下らない。

しかし、兄の運命もついに来た。8月13日夜、母と兄妹三人をよんで、戦場の父とも会えない、佐々木のおじ様も、秋田のおじ様も、お別れだ。あの一中のポプラのなつかしい運動場とも、まなびし教室とも、先生ともおわかれか、と悲しい声。手の水ぶくれをかきむしって。一心に一中校歌をさけび、よくわからない口もと。お母さん、目が見えなくなった、耳もきこえなくなった。一中学徒隊で14歳で死にます。短い人生です。といって、最後まで校歌を口にして、しずかになった時は、脈は切れていました。

僕は、兄が最後まで校歌を歌ったことを、どうしても忘れられません。